向陽新聞

2007年

❀4月号❀

※本来は新聞部が発行する向陽新聞ですが、伝統の向陽新聞を復活させるため、生徒会が名前をおかりして製作させていただきます。

復活!!? ～向陽新聞～

新年度が始まった。中学一年生・高校一年生に新たなパワーが加わり、春らしい爽やかな風が土佐校を包む。新しいパワーに負けてばかりはいられない。在校生だって今まで以上に力を発揮し、この学校を支えていくのだ。

そこで高校生徒会が目につけたのは、【向陽新聞】。かつては新聞部が校内のあらゆる情報や、生徒たちの意見を調査してまとめたものを、本格的な新聞として製作・発行してきた。しかし、現在、新聞部の部員数は〇。　思うに、いつも自分たちが受身だ（生徒が調べたり、まとめたりしない）から、何においても無関心だという現状があるのではないか。もし、部員が入ってくれたとしても、何もないところからは始めづらい。だからせめて、その礎になろうではないか、という結論に至った。

時代は進み、新聞は時代遅れだという風潮が高まっている。身の回りにはテレビや携帯電話を通して、二十四時間絶え間なく、新しいニュースが飛び込んでくる。この情報社会において、手間や費用のかかる新聞なんて・・・、という気持ちが恐らく多くの人の心にはあるだろう。だが、果たしてそうだろうか。新聞はいつでも、何度でも読める。文字による表現だけでは伝わりにくいことがあるという短所もあるが、すっきりとまとめられて、記者が伝えたい箇所がうきぼりになる。

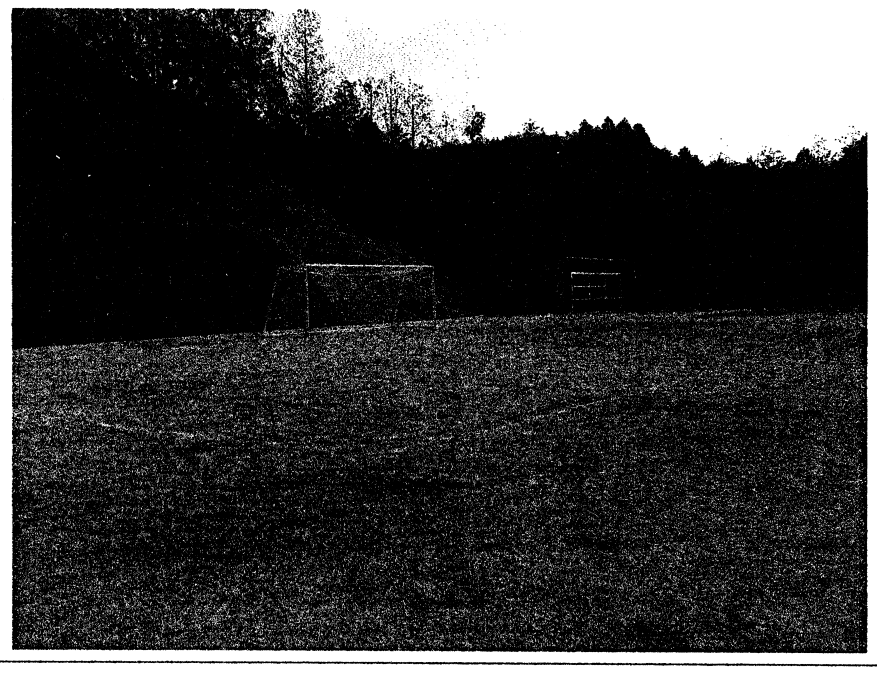
目指すは【生徒の　生徒による　生徒のための新聞】。生徒の目から見た学校。生徒が考える“教育”。そして生徒が望む土佐高校の未来。それを当事者である自分たち生徒が作り上げるのだ。実際に他校の校内新聞を調査してみた。なるほど・・・とても面白い。とある部の全国大会を記事にするべく大阪まで足を運び取材していた学校もあった。学年は違えど、一つの新聞を作るために切磋琢磨する姿を拝見して、とても清々しい気持ちになるのと同時に、大きな希望を見出した。

この先、学校内でのニュースやイベント・先生方のトークリレーもできればと思っている。何十年という伝統のある向陽新聞の名に恥じないように製作したいと思ってはいるが、過去の向陽新聞は、校内で大規模なアンケートをとり結果をグラフにしたり、写真をフル活用して新任の先生方を紹介したり…と、とても学生が作っているとは思えないできであった。完全な復活とは、新聞部に入部者があり、周期的に発行してくれるようになってからでないといえないだろう。新年度という節に、ぜひ新聞部への入部をお願いしたい。そして、この想いを無駄にすることなく、受け継いでくれる人が出ることを期待している。

向陽グラウンド完成！

三月十八日（日）、【向陽グラウンド】と命名された新グラウンドの竣工記念式典が行われた。

天候にも恵まれ、完成したてのグラウンドは、まさにその名に相応しいと感じられる太陽の下で輝く美しさであった。向陽グラウンドは、一〇〇円トンネルの料金所のすぐ西で、周りは山で囲まれている。自然に囲まれた中での練習は、きっと気持ちがいいんだろうなぁ・・・。そんな気持ちに耐えることができず、自分の役目を忘れ、記念式典が始まるまでの間、私は野球用グラウンドと共に作られたサッカーの練習用コートで一人走っていた。ここは風通しが非常に良い。少し肌寒くはあるものの、それもまた良し。清少納言がもしこの場にいたら、きっと《枕草子》（平安中期に書かれた随筆：【春はあけぼの…】など日常生活や四季の自然を観察）の向陽グラウンド版を書きたくなるだろうな・・・。とつまらぬことを考えてしまった。夏はかなり暑くなるのではないか、という話もあるらしいが、こんな立派なグラウンドで練習できるのなら、暑さなんて気にしないほどの意気込みをもって欲しい。（そう思うのはやはり、自分が屋内スポーツの部であり、少なからず他人事だという思いがあるからであろうか。）

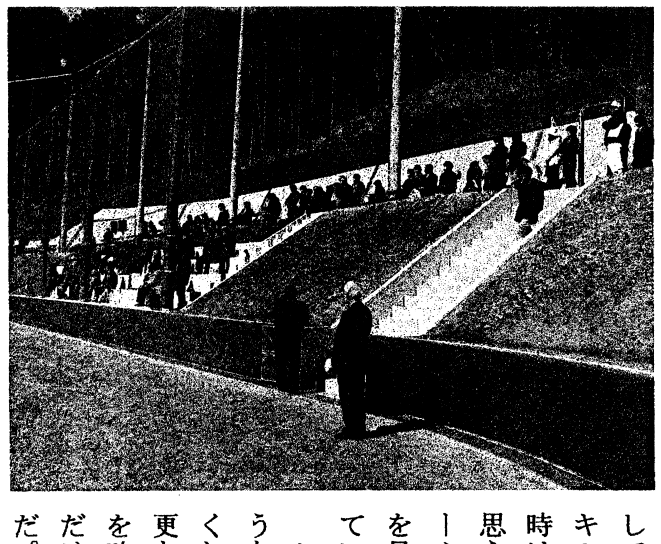


このサッカー用に作られたコートは、実はサッカーのコートの半分の大きさしかないし、費用の問題上、ネットも高く張ることができていない。このコートを使うサッカー部はどう思っているのだろうか。高校サッカー部のキャプテン・横田啓一郎くん(高三)にインタビューしてみた。『ハーフコートって言っても、今までの練習は、これのさらに半分以下くらいしかなかったき…。』とはにかみながら答える。『これだけあったら上等くらいできる。サッカー部だけしか使わんし、ムッチャ良い！』と嬉しそう。『ただ遠いことを除いてはね。』とユーモアたっぷりに語ってくれた。

向陽グラウンドと名づけた生徒代表として、記念式典に訪れた安田静香さん(高三)も、このサッカー用のグラウンドを見て感心。陸上部として体がうずかずにはいられなかったのであろう。『うわ～、すげぇ！』というと、早速足を踏み入れた。そこにサッカー部顧問の国見先生が・・・。にこにこしながら『いいやろ～』と安田さんに声をかけた。安田さんは『はい～～～！ここ、私たちが勝手に使ってもいいんですかぁ？』と逆に問いかける。これを聞いて国見先生は、やはりにこにこ笑いながら『利用料金、一時間いくらにしようかなぁ！』と、すでに我が物顔で答えていた。

竣工記念式典は、出席者全員で校歌斉唱をした後、校長先生・向陽会代表・OB代表で岡村甫さん（高知工科大学長）・高校生徒会長からそれぞれ挨拶があった。それに引き続き、主にこのグラウンドを使用する部の決意表明で、代表として高校サッカー部部長と、野球部部長・（金田将賢くん）が感謝の意と向上の意を表した。もちろん目指すはインターハイと甲子園である。甲子園と言えば、池上校長先生。発案・計画をしてくださった池上校長先生あっての向陽グラウンド。この日は風が強く、寒かったのだが、校長先生は『気合いが入って寒くない。』とワイシャツとスーツだけで参加なさっていたと事務の方から伺った。これには来賓の方も『さすが元甲子園児じゃ！』と頼もしそうに笑っていた。

そして、お待ちかねの野球部親善試合。この日のために、慶応義塾高校野球部が来てくださった。慶応義塾（※一八五八（安政五年）に福沢諭吉が江戸鉄砲洲に創設した洋学塾を六八（慶応四）年芝に移転して改称したもの。一九二〇（大正九）年に大学令による大学、四九年現学制による総合大学となる。）と言えば、池上校長先生をはじめ高校野球部の顧問の高多先生と三木先生も卒業生であり、土佐高校とは少なからず御縁があるらしい。校長先生・各野球部の先生方からの挨拶、記念品の贈呈が行われた後、少しだけ練習が行われ、始球式には、東大・野球部のピッチャーで一六勝という今だに記録を保持されている岡村甫さんがピッチャーで、校長先生がキャッチャーというゴールデンペアで行われた。校長先生は本番では緊張のためか球を落としてしまわれたが、キャッチボールの時は七十二歳とは思えぬ元気なフォームやピッチングを見せ、場を沸かせていた。



これからどのような活躍を見せてくれるのだろうか。更なる飛躍と進歩を確信したのは、私だけではないはずだ。

がんばれ、サッカー部！　がんばれ、野球部！

そして向陽グラウンドの完成に心から乾杯！

2007年度・前期生徒会立候補者！

会長・副会長の立候補を募ります。

立候補者は推薦人１人を得て、各、クラス・番号・名前を明記し、１階・理科第２講義室横の職員室・濱田哲雄先生に届け出をしてください。

締め切り：4月24日（土）　16：00まで

2007年度・前期中央委員会発足！

会　長：中山雄二　　副会長：杉本皐太郎・池田梨沙
委　員：荒木嵯千・岩村紗弓・弘瀬公乃・古川優也
　　松岡渓太・西村佳記・山崎舞子

2006年度・後期中央委員会より2007年度前期生徒会へとバトンタッチされた。土佐中学校、ひいては土佐中学高等学校全体の改革への意欲を見せる中山・杉本・池田の３トップ。目標は【委員全体でまとまりのある活動をする】こと。

後期の八木勘輔（現高１）生徒会長は温かい目で皆を見守りながらも、時にすばらしい統率力を見せ、中谷寛（現高１）副会長は場の雰囲気を和ませるという陽気な人柄であった。その後継者となる中山も、過去２回の副会長経験を持つ。・・・が、中山の弱点は【遊び好き】であること。気を引かれるものがあると、すぐに飛びついてしまう。そんな中山はおっとりとした性格であるが、なぜか彼の醸し出すオーラには人を惹き付ける力がある。意気込みを聞いたところ、『ニヤー！』と即答した。『これ、新聞になるかもしれないんだけど本当にいいの？』と聞くと、『大丈夫です！言葉にできぬ想いが、きっと皆には伝わっていますから。』となぜか自信満々・・・。

杉本も『がんばります。ふふふ・・・』と不気味な笑みを見せたが、すでに、昨年の中央委員会・向陽祭実行委員会の活躍で実力をみせている。

池田さんは『分からない事ばかりで不安もありますが、皆さんの役に立てるよう一生懸命がんばります♪』と笑顔で答えてくれた。なんて頼もしい池田さん!!

いつもにまして個性的な委員で構成された中央委員会。これからの活躍に期待したい。

何のための卒業式だ！

卒業生の保護者から苦情が・・・

『どうしてあんなに寝ている在校生がいるんだ！』

昨年度の三月三日（土）、体育館で催された高校卒業式の後・・・。酒井先生や私のもとに、数名の保護者の方々から苦情が届いた。というのも、卒業式に出席していた高校一年生・二年生の中に、式中にもかかわらず寝ていた人がいたからなのだ。相当頭にきている様子であった。『いびきをかいている人もいたし、起きている人は起きている人でずっとしゃべっているし一体何なのですか！この学校は！』　謝ることしかできずに『すみません。』『すみません。』と平謝りをする私に、『いや、別にあなたに怒っているわけじゃないんですけど。ただね、寝るのなら参加して欲しくないんですよ。出るなら出るでしっかりとして欲しいんです。』と言って、最後に『来年からは、私たちのような気持ちになる人が出ないようにしてあげてください。』と残して、去っていった。このお母さんの気持ちは痛いほどによくわかった。我が子の新たな旅立ちを見るために、この式に臨まれたのだ。幼い頃よりずっと育ててきた自分の宝物の立派な巣立ちの時を見に来たのである。

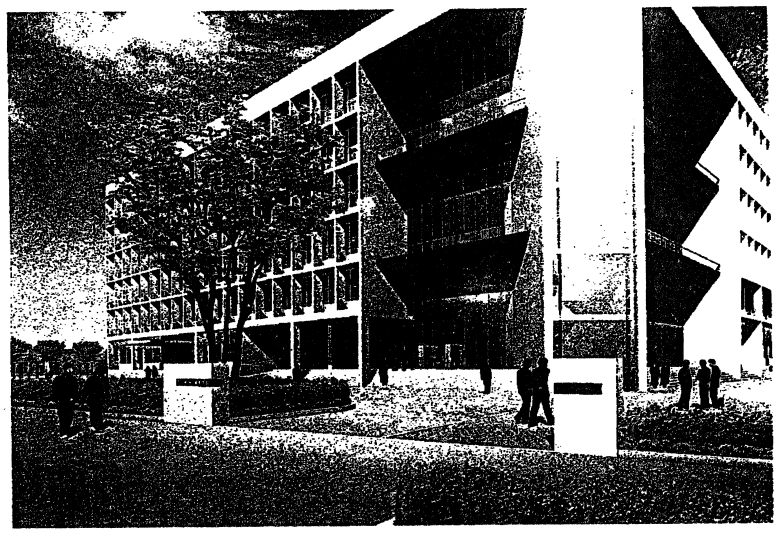
もし『参加する意欲のないものは出席しなくてもよい。』としても（出席率がどのようになるのかは分からないが）果たして本当にそれでいいのであろうか。私には先輩方から受けた恩が、数え切れないほどある。思い出だってたくさんあるし、怒鳴られて教えこまれたマナーの数々も、今では自分の財産であると感じる。これまで学校を支えてこられた先輩に感謝すると共に、これからも自分の先輩であることを誇りに思うことだってあるだろう。

気付かぬうちにたくさんの経験をさせて下さっているはずだ。いずれ自分が卒業を迎える時、同じ態度を後輩からとられたらどうであろうか。どうでもいいと思う人もいるだろうが、決していい思いはしないであろう。卒業式が単なる【恒例行事】の一つではなく、自分たちの一つの区切りとして臨むものであって欲しいと思う。

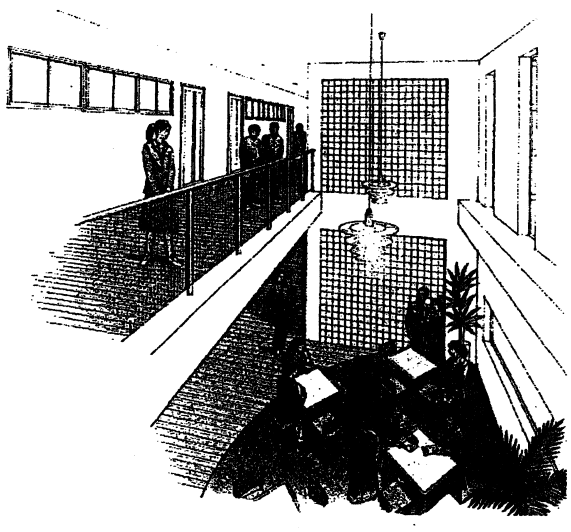
先輩への感謝を胸に、心から送り出してあげてこれからの学校は自分たちが支えていくのだという強い信念を持てる人間になって欲しい。

新校舎★情報

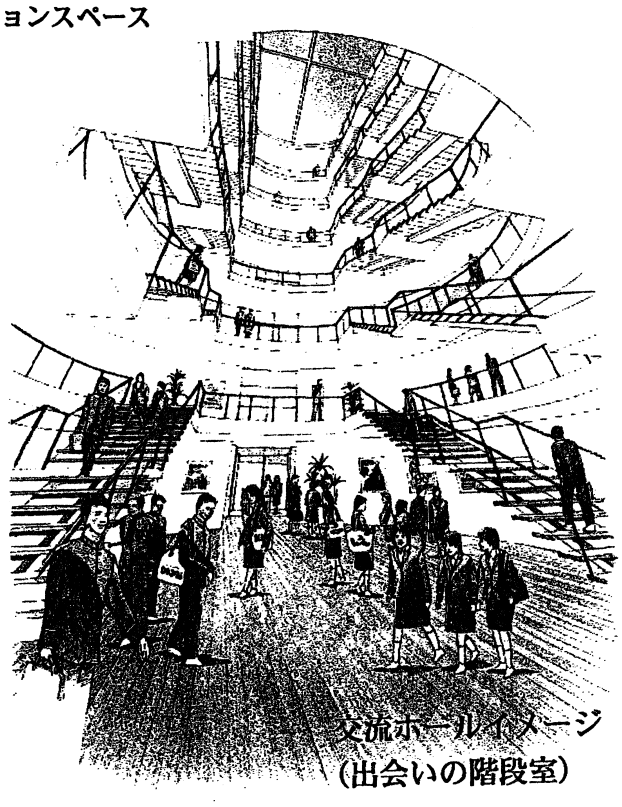
新聞に残すのなら、今の校舎をメインにした方がいいのだろうか…、と考えたのだが、一番気になるのはやはり【未来】。今回は新校舎のイメージを少しだけ紹介いたします。



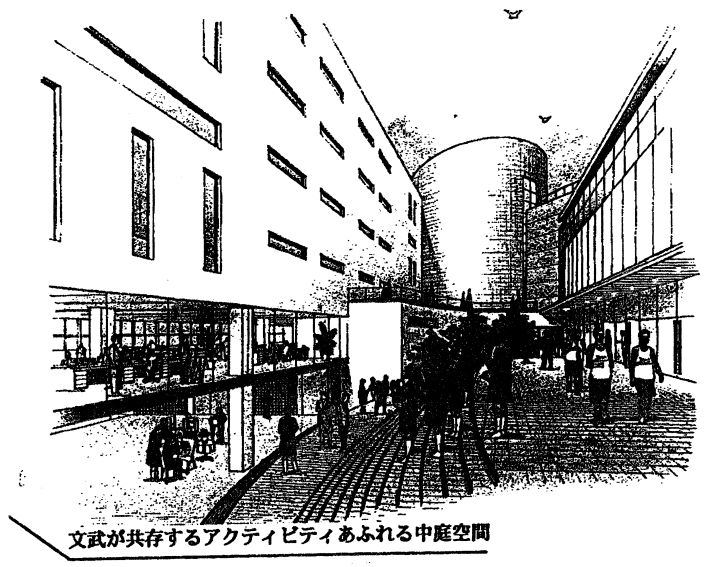
開放的でわかりやすい昇降口、そして新たな学校の顔



生徒たちの交流を誘発する
コミュニケーションスペース



交流ホールイメージ
（出会いの階段室）



文武が共存するアクティビティあふれる中庭空間

高校生は来年四月から使用予定？
高まる期待・・・

残念ながら、現在の高校三年生は新校舎での勉強や思い出作りはできない。今、生まれ変わろうとしている土佐校の校舎…。

建てかえで良い環境になるのは間違いないが、中身は自分たち生徒自身。しっかりとした軸を作り、表面だけでなく内側も耐震性に優れているようになれば、と思う。